

百科全書「教導説」の検討

—箕作麟祥による「Education」の翻訳—

村瀬 勉・早川亜里・田中萬年

目 次

1. はじめに
 2. 「Chambers's Information for the People」の刊行
 3. 「教導説」の原書
 - (1) 原書はなにか
 - (2) 原書はいつ刊行されたか
 - (3) 原書の日本への持込み
 4. 箕作による「Education」の翻訳
 - (1) 箕作の訳文
 - (2) "Education" の訳語としての「教導」と「教育」
 - (3) 「教導」と「教育」の混用と理由
 - (A) 単純な誤用か—訳語と原語の使用頻度
 - (B) 文脈による訳語の使い分けか
 - (a) 訳文の文脈による訳語の使い分けか
 - (b) 原文の文脈による訳語の使い分けか
 - (C) 政治的・社会的背景の影響か
 5. 結び
- 補足 文献 資料

1. はじめに

一般的に、政治や社会の体制が変わると学校制度も新しくなる。その変革は単純ではなく様々な形で紆余曲折を経て進む。

今日、1948（昭和22）年に制定された「教育基本法」の改革が論議されている。60年の経過の中で政治体制が変化したように見えないが、実際は、この時間の流れの底で大きく変化しつつあるのだろうか。

徳川幕府による大政奉還の後、明治政府は権力を中央に集め統一国家の建設に乗り出し、そのために必要な人材の養成と共に、思想の支配を確立するため文部省を設立し、学校を設置して教育と教化運動を始めた。

当時の文部省の大規模な翻訳事業も、その一環であり、啓蒙の意図をもとに進められた作業であった（仲・稲垣・佐藤、1982）。しかし、その後、福沢諭吉（1834-1901）・箕作麟祥（1846-97）ら啓蒙的洋学者の

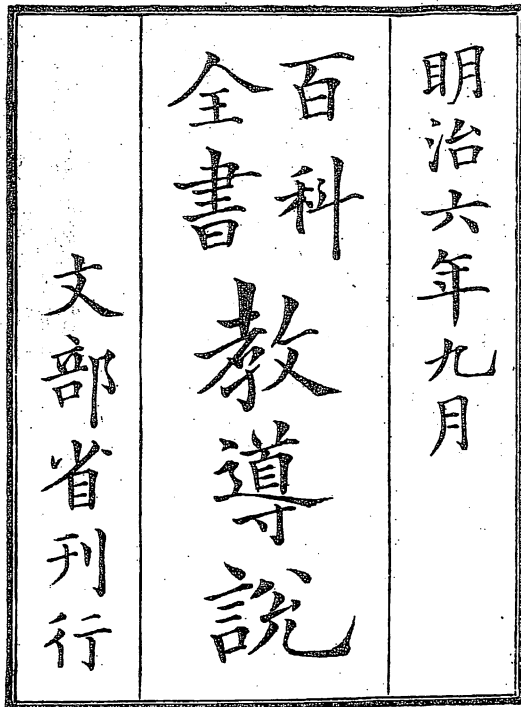
著作ばかりでなく、文部省自身が刊行した道徳書も、教科書として使用を禁止されるようになった（補足1）（明治以降教育制度発達史1938、山住1987）。

箕作（大槻編1907）（補足2）は多くの翻訳書、例えば、1871年には仏人Bonne著「泰西勸善訓蒙前編（原書は1867年版）」（補足3）、1873年にはChambers著「百科全書」の一項目「教導説」（文部省刊行）を出版した。「教導説」は、5年後「教育論」と改題された（図版1、2）。

本稿は、1870年代における英語 "Education" の訳語の問題を扱うもので、対象は前記の「教導説」、原書は、英国の出版社 William and Robert Chambers が刊行した「Chambers's Information for the People」（以後、特記の場合を除きCIPと略記する。）の一項目「Education」である。

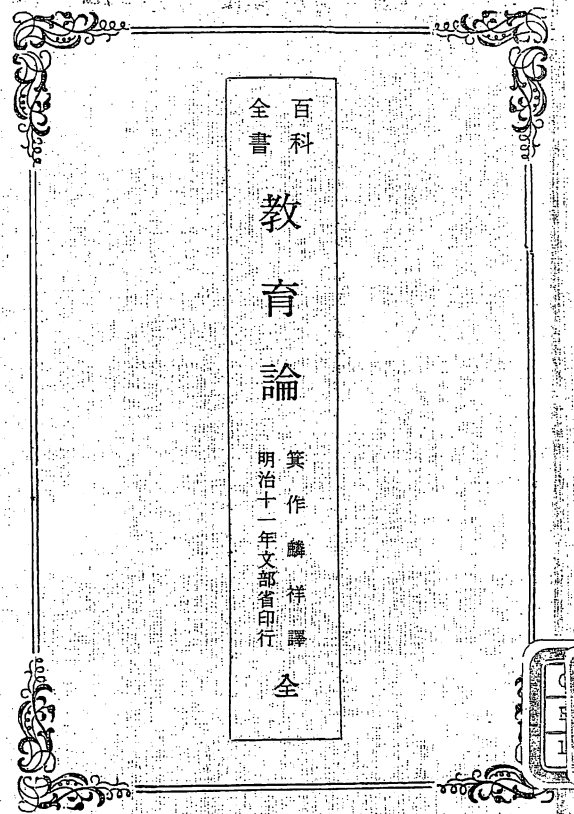
図版1 「教導説」扉

Fig. 1. Title page of "Kyo-do setsu"



図版2 「教育論」扉

Fig. 2. Title page of "Kyo-iku ron"



出版社はいずれも「東京書林和泉屋市兵衛」である。

この「教導説」に関して次の問題がある。すなわち、1)原書はなにか。2)その原書の刊行年。3)いつ日本に持ち込まれたか。4)翻訳はどのようなものであったか。5)何故、項目名「Education」が「教導説」と訳され、本文中で英語 "Education" が訳語「教導」と「教育」の二様に訳され混在するのか。6)さらに、何故、「教育論」と改題されたか、である。

本稿の目的は、これらの問題を解明し、当時の政治的混迷の中におかれた教育の状況を知り、今日の、わが国における教育の混迷の要因をひもどく手掛かりを得ようとするものである。

2. CIPの刊行

CIP出版までの大凡の経緯は以下の通りである(文献Chambers's family)。

兄、William (1800-83)、弟、Robert (1804-71)は、Scotland南部Peeblesの綿織物業者の子として生まれ、1813年、Chambers家はEdinburghに転居した。1814年、RobertはBritannica発祥の地Edinburghの書店に徒弟奉公し、1818年、Leith Walkにおいて父親の蔵書数冊でbookstall-keeperを開いた。1819年に独立、書店を、さらに出版業を始めた。兄は、弟と同

じような仕事を始め、結局、二人は共同経営者として、W.& R. Chambersという出版社を起こした。

兄弟は、1819年頃、The Songs of Robert Burns、1824年には、Traditions of Edinburghを出版し、1832年には兄弟が何時も優先していた「誰もが利用できるような教育と情報のため」の定期刊行物(週刊) Chambers's Edinburgh Journalを出版して大成功を収めた。この刊行物は1834年に小冊子で学校の読み物 CIPとして刊行され、1842年に改訂版が出版された。これは100以上のテーマを扱い、1859年にはChambers's Encyclopediaの第一部となった。

CIPの刊行状況を知るために1842年以降の出版を表1に示した。ここで「無年記版」とは、国立国会図書館蔵の刊行年不明版のことである。

この表は、1) 国立国会図書館、2) Library of Congress (USA)、3) NACSIS Webcat、4) Making of America: <http://www.hti.umich.edu/m/moagrp/>、5) Find in a Library: CIP (YAHOO USA)、6) いくつかの米国の大学の図書館のホームページ等で調べたものである。複数の図書館などで、同一の出典がある場合は一つに纏めた。The British Libraryについては不明であった。

表1 1842年以降における CIP、および箕作訳の出版(年代順)
Table 1. CIP publication history after 1842.

CIP 刊行名、	出版地、	出版社	刊行年	備考	出典
2v. New and improved ed.	Edinburgh;	W. and R. Chambers	1842	第2版か	国立国会図書館所蔵
A popular encyclopedia	Philadelphia;	Zieber (1st American ed.,	1847-		University of Oregon
with numerous additions and more than five hundred engravings)			1848		Library (以下UOL)
Volume I	Edinburgh;	W. and R. Chambers; London;	1848	第3版か	同上
Volume II	Edinburgh;	W. and R. Chambers; London;	1849		同上
2v. (publisher is unknown)			1849		Library of Congress
Vol. I .II	Philadelphia;	J. & J. L. Gihon	1850		UOL
Fifth American ed. with numerous additions and more than five hundreds engravings. Vol. I {II}			[c1846]		同上
Philadelphia,	J. B. Lippincott & co.	Grambo, W. and R. Chambers	1854		Find in a Library
London and Edinburgh;	W.& R. Chambers		1857	1857版は箕作訳	同上
2v. New ed.,	Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	1857	の底本ではない	UOL
15th American ed. 2v.	Philadelphia;	J. B. Smith & co.	1857		Library of Congress
2v. New and improved edition	Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	1857		Making of America
Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	W. and R. Chambers	1860	改訂したか	Find in a Library
Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	W. and R. Chambers	1866	改訂したか	Find in a Library
2v. New ed.,	London and Edinburgh;	W. and R. Chambers	18??	第4版か	国立国会図書館所蔵
(この版は、無年記版であるが、後述推定によりこの位置に記載)			無年記版	箕作訳底本か	
2v. New and improved edition	Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	1867	上記無年記版と外見内容同じ	Making of America
San Francisco;	H. H. Bancroft and W. Chambers		1868		Find in a Library
箕作麟祥たち翻訳開始			1871年7-8月		
箕作麟祥訳「教導説」	明治6年9月、文部省刊行、	東京書林(和泉屋市兵衛)	1873		明治初期教育稀覯書集成(唐沢富太郎編・雄松堂書店1880)
Philadelphia;	J. B. Lippincott & co.	W. and R. Chambers	1874		Find in a Library
2v. 5th ed.,	London and Edinburgh;	W. and R. Chambers	1875	第5版と記載	国立国会図書館所蔵
Hyakka zensho(百科全書)	東京:文部省、	明治9、	1876		
箕作麟祥訳「教育論」	明治11年、文部省印行	東京書林(和泉屋市兵衛)	1878	上記「教導説」の語「教導」を「教育」と改訳	文部省百科全書19青史社(1986)
5th ed. 2v.	London and Edinburgh;	W.& R. Chambers	1880		Library of Congress

また、W. & R. Chambers を受け継いだ英国、米国の出版社に CIP のカタログ、刊行年、版番号について問い合わせたが、いずれも 1800 年代の記録は保存されていないとの回答であった(私信①②③)。したがって、CIP の全てを網羅することは出来なかった。なお、太枠でまとめたのは、殆ど同じ年に London and Edinburgh 版(以下特別の場合を除き、英国版と記す)と Philadelphia 版(米国版と記す)が対になって刊行されていることを示す。

3. 「教導説」の原書

(1) 原書はなにか

表1に示したように、数多くの版数のCIPが刊行された。本稿の問題の検討には、このうちどの版が箕作訳「教導説」の原書であるかを確かめる必要がある。

現在は、著書、訳書について、原書名、原書著者、訳書名、訳者、刊行年、発行所などを明記する習慣があるが、箕作訳の「教導説」については、「明治六年九月」「文部省刊行」とあり、その「百科全書叙」に「百科全書著英人占弗兕氏所著」と著者名が明記され、「明治六年八月 古屋矯謹撰」(「教育論」には

表2 1857年版、無年記版、1875年版へのContents IIの変更および翻訳

Table 2. Revisions of the contents of three editions, 1857, n.d. UK and 1875.

1857年(英国版)を基本として、無年記(英国)版への変更を太文字イタリックで示し、[イタリック]で1875年(英国版)の変更を示す。なお、無年記(英国)版と1867年(米国)版のPreface, Contents, Textの内容は全く同じである。翻訳は、明治6(1873)年9月文部省刊行「教導説」下編 および福録(1968)に掲載されているものである。

1857年版、無年記版、1875版のContentsの比較	翻 訳
Physical History of Man – Ethnology <i>[Anthropology]</i>	人種之説
Language	言語篇
Constitution of Society – Government	交際篇附政体
History and Nature of Laws	法律之沿革事體
History of Ancient Nations	太古史
History of Greece	希臘史
History of Rome	羅馬史
History of the Middle Ages	中古史
History of Great Britain and Ireland	英國史
Constitution and Resources of the British Empire	英國制度國資
Military and Naval Organisation	海陸軍制
Europe	地誌歐羅巴
England and Wales	地誌英倫、威勒斯
Scotland	地誌蘇格蘭
Ireland	地誌愛倫
Asia – East Indies <i>[Asia]</i>	地誌亞細亞、附東印度
Africa – Oceania	地誌亞非利加、附大洋群島
North America	地誌北亞米利加
South America – West Indies <i>[South America – West India Islands]</i>	地誌南亞米利加附西印度
The Human Mind	人心論
Phrenology <i>[削除]</i>	骨相説
Logic	明理學
Natural Theology – Ethics	造化妙用説附人道學
History of the Bible – Christianity <i>[History of the Bible]</i>	西洋經典緣起附基督教説
Pagan and Mohammedan Religions Superstitions Religious Churches and Sects <i>[Christian Churches]</i>	無年記版、1875版で変更 洋教宗派之説
Mohammedanism – Hinduism – Buddhism	回教附印度教、仏教
Scandinavian Mythology, &c. – Minor Superstitions	蘇干地那威神學附諸小派
Key to the Calendar	歲時記
The Private Duties of Life Practical Morality – Personal and General Duties <i>[順序変更、一部削除]</i>	変更 脩身論
Public and Social Duties of Life Practical Morality – Special Social and Public Duties	変更 接物論
Political Economy	經濟論
Commerce – Money – Banks	貿易論附貨幣バンク
Population – Poor-Laws – Life-Assurance	戸籍附救貧法ライフアッシュランス
Social Economics of the Industrial Orders	百工儉約訓
Popular Statistics Social Statistics <i>[Practical Morality]</i>	変更 國民統計學 順序変更、一部削除
Education	教導説(1878年版「教育論」)
English Grammar	英吉利文法
Arithmetic – Algebra	算術附代数学
Geometry	幾何學
Drawing – Painting – Sculpture	畫附彩色彫刻
Gymnastics – Out-of-Door Recreations	體操附戶外嬉戲方
Indoor Amusements <i>[Music]</i>	戸内遊戯方 無年記版で削除、1875版で復活
Archaeology	古物學
Rhetoric and Belles-Lettres	善論學(後に修辭及美文)
Printing – Lithography	刷板術附石板術
Engraving – Photography	彫刻術附写真術
Music – Musical Instruments	削除
Household Hints	家事儉約訓
Index, Glossary of Terms, Titles, &c. <i>[Index, Titles, &c.]</i>	

ない)とある。また、訳者による明治六年初夏に書かれた「緒言」には「此編ハ英人『チャンブルス』氏所著ノ百科全書」の記載がある。しかし、原書名、刊行年などの記載はなく、「教導説」の原書が何かは不明である。

原書が何かの推論として、福鎌 (p.49、1968年の論文については以後頁数のみ記す) は、Contentsを詳細に比較検討し、「国会図書館所蔵の、三点の原本」のうち、図版 3、4に示した「新版」New Edition無年記版が原書、「第四版」であるとした (補足4)。

表2に1857年版、無年記版、1875年版、および箕作訳のContentsを並記して比較した。箕作訳のContentsが無年記版と一致することが分かる。「第四版」であるかどうか、また、本文の内容は別としてContentsの項目を見ると、1857年から無年記版への改編より、無年記版から1875年版への改編が多いことが分かる。ただし、この1875年版は、箕作訳が1873年の出版であることから「無年記版」の対象ではない。

本稿では、さらに、資料2に示すように、箕作訳「総論」の一部、それに対応するCIPの1857年版原文、無年記版原文、筆者の[試訳]を比較してみると、箕作訳は1857年版に対応せず、無年記版が箕作訳の底本であることは明らかである。なお、ここで「総論」とは、原文の初め約1頁の部分に、箕作が付け加えたもので、CIPの原文には対応する語はない。

(2) 原書はいつ刊行されたか

無年記版の刊行年は、福鎌 (p.53) によって無年記版のPreface に記載されている年代の検討から「1868年の明治維新の前後」(p.54)と推論された (補足4)。

本稿では、既に表1の太枠で示したように、殆ど同じ年に英国版と米国版が対で刊行されていることに注目した (表3)。

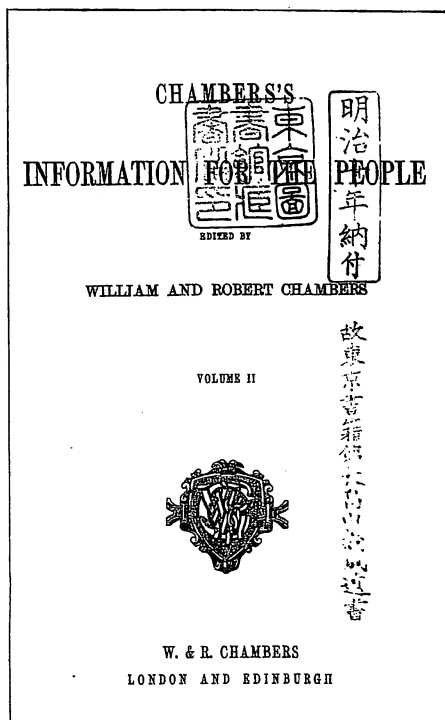
この表を見ると1867年相当の英国版が欠落している。1867年には「米国版」があり、その外見、Preface、Contents、Text内容が問題の「無年記英国版」と全く同じであることから、この欠落部分は「無年記英国版」が埋め、したがって無年記版の刊行年は1867年とするのが妥当である。何故、「無年記版」に限って無年記なのかは不明である。

表3 英国版と米国版の比較

Table 3. Pairs of publication year of UK and USA eds.

英国版年	米国版年
1848, 1849	1847-1848
1857	1857
?	1867
1875	1874

図版 3 国立国会図書館蔵 CIP 無年記版IIの扉
Fig. 3. The title page of n.d. UK ed. CIP.



図版4 左の無年記版のCONTENTS II
Fig. 4. Contents II of n.d. UK ed. CIP.

	No.	Page
GENERAL HISTORY OF MAN—ETHNOLOGY,	63	1
LANGUAGE,	64	17
CHARACTERISTICS OF SOCIETY—GOVERNMENT,	65	28
RELIGION AND MATTERS OF LAW,	66	49
HISTORY OF ANCIENT NATIONS,	67	65
HISTORY OF GREECE,	68	81
HISTORY OF ROME,	69	97
HISTORY OF THE MIDDLE AGES,	70	115
HISTORY OF GREAT BRITAIN AND IRELAND,	71	129
CONSTITUTION AND STRUCTURE OF THE BRITISH EMPIRE,	72	177
MILITARY AND NAVAL ORGANIZATION,	73	193
RELIGION,	74	209
ENGLAND AND WALES,	75	225
SCOTLAND,	76	241
IRELAND,	77	257
AFRICA—EAST AFRICA,	78	273
WEST AFRICA,	79	289
SOUTH AFRICA—SOUTH AFRICA,	80	305
THE HUMAN MIND,	81	321
PHYSIOLOGY,	82	337
LOGIC,	83	353
NATURAL SCIENCE—PHYSICS,	84	369
HISTORY OF THE EARTH—GEOLOGY,	85	385
MINERALOGY AND METALS,	86	401
AGRICULTURE—HORTICULTURE—FISHERY,	87	417
MANUFACTURES—MINING—METALLURGY,	88	433
ART TO THE GARDEN,	89	449
PHYSICAL IDENTITY—PERSONAL AND GENERAL IDENTITY,	90	465
PHYSICAL IDENTITY—PERSONAL SOCIAL AND GENERAL IDENTITY,	91	481
POLITICAL ECONOMY,	92	497
COMMERCE—MONEY—BANKING,	93	513
POPULATION—MORALITY—LITERATURE,	94	529
SOCIAL ECONOMICS OF THE INDUSTRIAL REVOLUTION,	95	545
RELIGION,	96	561
SCIENCE—PHYSICS—MATHS,	97	577
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	98	593
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	99	609
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	100	625
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	101	641
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	102	657
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	103	673
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	104	689
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	105	705
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	106	721
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	107	737
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	108	753
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	109	769
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	110	785
PHYSICS—MATHS—PHYSICS,	111	801

(3) 原書の日本への持込み

CIPが何時、日本に持ち込まれたかについては、Verbeck (1830-98) から箕作が譲り受けたという説(平凡社編「百科事典の歴史」1964 p.57) (補足5)がある。しかし、その説について福鎌 (p.45) はVerbeckの来日が1859年であり無理があるとしている。

さらに、福鎌 (p.61) は、福沢諭吉蔵書説として、福沢が1867 (慶応三) 年に米国から持ち帰ったと伝えられる「チャンバースの百科字典」がCIPでありうると指摘している。実際、福沢と箕作とは「明六雑誌」の同人として親交があり、福翁自伝 (1978) の記載は、その指摘を否定しない (補足6)。

さらに、福鎌 (p.61) は、幕末から明治初年にかけて福沢等によって翻訳されたChambers 編著の啓蒙書が数点あることに注目して、文部省がChambers関係

書の集大成としてCIPの翻訳刊行に乗り出したのは当然であり、1871 (明治4) 年頃には、「百科全書」の原書 (CIP) の入手は決して困難ではなかったとした。

本稿では、上のフルベッキ説、福沢説と違った可能性を以下に提案する。

無年記版CIPの扉 (図版3) を見ると、「東京図書館蔵書之印」(国立国会図書館2005)、「明治十年納付」の印の下に「故東京書籍館長畠山義成遺書」とある(東京書籍館については、山田2004)。これは無年記版の日本への持込みの問題に対して何を意味するのであろうか。その意味を、畠山義成の経歴を辿って推論してみる。

畠山、および関連については多くの文献がある(例えば、田中1977、富田1985、木村1986、Encyclopedia 2005、補足7)。それを表4にして、箕作の略歴(日本歴史学会 1981)と比較した。

表4 「教導説」刊行前後(太文字)の畠山義成と箕作麟祥の略歴年表

Table 4. The brief personal history of Hatakeyama and Mitsukuri.

畠山義成 1843 (天保14) 年 - 1876 (明治9) 年	箕作麟祥 1846 (弘化3) 年 - 1897 (明治30) 年
	1861 (文久元年) 蕃書調所英学教授手伝並出役 「英和対譯袖珍辭書」の原稿完成に堀達之助に協力
	1864 開成所教授見習・外国奉行支配翻訳御用頭取
1865 (元治2) 年3月22日薩摩藩派遣留学生として渡英、5月28日 London着。8月中旬、University College London法学部に入学、勉学上の指導者は同大学化学教授Alexander Williamson博士。	
1866夏 休暇はフランスに遊ぶ。	
1867年 留学生は分散し、7月、森有礼らと渡米し、当時New York州 Armenia にあった The brotherhood of the New Life (Thomas Lake Harris (1823-1906) 主宰、新生同胞教団: Encyclopedia (2005)) に入るが、1868年脱退し、Rutgers University (New Jersey) に入学、社会学を専攻、卒業後修士号を受ける。ここでDavid Murray (1830-1905) 教授を知る。	1867 (慶応3年) 徳川昭武に随行して仏国に留学 CIP米国版出版、(国立国会図書館蔵の無年記英国版も出版か)
	1868 (明治元年) 6月新政府に出仕して開成所御用掛 9月一等訳官
1871 (明治4) 年4月 明治政府より帰国命令を受け秋の卒業と同時に帰国の途につくが、欧州経由のパリで岩倉使節団随行を命じられ、再びアメリカにもどり案内役を務めるかたわら随員の久米邦武と「米欧回覧実記」を筆録する。	71.7-8 編集頭、「百科全書」の翻訳開始
	1872.1.11 文部省の学制取調掛
1873年9月13日 使節団と共に帰国、横浜着。 10月 文部省に出仕し、教育制度の改革にかかわる。東京開成学校(東京大学の前身)初代校長となる。この際Murrayが文部省に招かれた。	1873 翻訳局長 7月「百科全書」和訳版を刊行開始 9月「百科全書」の項目「Education」を「教導説」として翻訳刊行
1874年 明六社に参加	1874.2 明六社制規定され、正式に発足、参加
1875年3月 東京書籍館・博物館両館長を兼任、	1875 「教導説」を「教育論」と改訳刊行
1876年4月フィラデルフィア万国博覧会出品事務のため渡米、かたわらアメリカの教育制度を視察。パナマ、サンフランシスコ経由で帰国途上10月20日、アメリカの客船中で病没。34歳。	

島山の留学は、1865（元治2）年、英国で始まり、1867年、米国に移動した。この年、CIPの米国版が刊行され、したがって、前述のように、この年、現在国立図書館蔵（図版3）の無年記英国版も刊行された。島山はそれを購入し（米国移動後ならば米国版を購入したであろう）、米国に移動する際、日本に送付したか、あるいは1871（明治4）年4月に召還された際、日本に送付したか、誰かに委託し日本に持ち込んだという筋道の可能性を指摘しておきたい。なお、「どういう経路で、この百科事典の原書が文部省に入り、どういう経路でその翻訳が企てられたか」については、福鎌（1984p.41）の検討があるが、結局、現在も不明である。

4. 箕作による「Education」の翻訳

(1) 箕作の訳文

CIPの一項目「Education」の翻訳事情については、大槻が「箕作麟祥君伝」（大槻編1907）（補足2）などで述べているが、別にCIPへの島山の関与を仮定するならば表4にあるように、数年後、福沢同様、島山も明六社に参加しているため箕作との交流があり、箕作が直接ではなくとも関係者からCIPを手に入れ、翻訳を始めた可能性はある。

翻訳文については、加藤周一が「明治初期の翻訳」（加藤・丸山1991）で指摘しているように、「福沢を除く明治維新前後の翻訳家たちは、ほとんど常に、漢文体で、それを流暢にするために、英語原文の一部を省いて要約し、原文にはない成句を挿入している」。

また、福鎌（p.292）は、箕作の訳文を「翻訳そのものは、大意を把握するところに中心がおかれている。これは当時の一般の趨勢である」と指摘しているように、原文と訳文の照合が極めて困難なほどに省略と追加があり、翻訳というより翻案に近い場合も多い。しかし、文章は名文である（例えば、外山1907）。これらの事情は、英文と訳文を並記した資料2をみれば明らかである。なお、[試訳]は、上に述べた箕作の翻案に近い訳と違って原文と対比し易いように直訳に近い形で訳してある。

一語一語の対応が困難な一例として、総論後半の一節句を再び右欄の表5に挙げておく。原文と訳文を比較すると、訳文は原文の意識として大意を表しているが、原文と訳文が直接対応するのは太文字の部分だけである。明治・大正の翻訳に関しては、川村・池内（2000）、および鴻巣（2005）等の解説がある。

(2) "Education" の訳語としての「教導」と「教育」

CIPの一項目名「Education」は、前述のように1873年に「教導説」と訳され、1878年には「教育論」と改題された。日本語「教育」が英語 "Education" に

表5 総論一部の原文と訳文の比較

Table 5. Comparison between the original and version.

Of the mental system, he views those faculties which constitute the intellectual powers as requiring to be drawn out, exercised, and instructed, so that they may operate readily and efficiently for all the various purposes which they are designed to serve; and those, again, which constitute the moral feelingsas calling for the exertion upon them of all externalmoral influences - at the head of which stands the revealed will of God with regard to human destiny - in order that the best possible state of feeling may be attained with regard both to the affairs of the present and to a future state of existence. (原文 p.593右欄)

第二二人ノ智心ヲ啓キ之ヲ錬磨教導シテ能ク百般ノ用ニ供セシムルヲ論シ第三二人ノ善心ヲ淬励鼓舞ス可キ為ノ勸善懲悪ノ教ヲ設ケ「且人ノ運命ニ管スル天道即チ經典ニ記スル所ヲ説テ現在未来ノ諸事ニ及ボシテ人ヲシテ善心ヲ起シ悪心ヲ制セシムルヲ論ゼントス」（「教導説」p.5右欄）

出会ったのは1866（慶応2）年頃と推測されるし、その後の殆どの英和・和英辞典で「教育」と "Education" の対応が一般的である（村瀬・田中2001）（資料1）。したがって、1873年に、「教導説」ではなく「教育論」と翻訳されて良かったはずである。

では、本文中ではどう訳されているであろうか。

まず、「教導（法）」と訳された英語は "Education" のみかを「総論」と訳文全体について調べ表6に示した。"Education"だけでなく関連語、および意識として「教導」と訳されていることが分かる。

表6 「教導（法）」と訳されている原語

Table 6. English words translated into "Kyo-do."

総論において 教導（法）と訳 されている英語	education (educational, educate)
	learning
	instruct
	意識から
全体において 教導（法）と訳 されている英語	education (educational, educate, educating)
	training (train)
	learning (learn)
	instruction (instruct)
	意識から
teaching系統の原文は「教ユル」などと訳され、「教導」「教育」はない。	

表7には、訳文における「総論」の文脈からみた「教導」と"Education" 関連語の状況を示した。「教導」

の殆どが "Education" の訳となっているが、「意訳」によって「教導」と訳した箇所もある。

表7 訳文の「総論」における「教導」および "Education" 関連語

Table 7. "Education and related words" for translated word "Kyo-do" in the initial part of Article "Education."

(p.593左)	EDUCATION	教導説 (項目名)
	general elementary education	初学教導ニ用フル
	A 'liberal' education	博通教導法ヲ設ケシ
	to be sufficient to fit	教導スルニ足ル
	this scanty education	此等僅々ノ数科ト雖トモ亦其教導ヲ受ケ
	school-learning of any kind	学校ノ教導ヲ受クル者
	with respect to education	教導法上ノ識見
	ought to be educated	教導ヲ受ケシム可キノ
	the means of educating	教導ノ方法上ト
	a branch of education	教導ノ一部タルノミニ
	liberal education	博通教導法中ノ
	the term educate	「エジュケート」ノ字
	the Latin educare	羅甸語 「エジュカーレ」
	does not ill express the first great principle of the science	教導ノ旨趣ト相適ヒ
	with regard to education	教導ノ事ニ就キ
	proper steps can be taken for working it out in practice	教導ノ法ヲ實際ニ施行スル
	the being to be educated	教導ヲ受クベキ者ノ
	(直接対応する英語なし)	教導ヲ受ク可キ者ヲ論ズル時ハ
	a theory of education	教導ノ方法ニ於テモ其理亦
	(The subject must needs~) (直接対応する英語なし)	教導ノ法ニ於テモ亦十全ナル事 教導ノ法モ亦随テ
a scheme of education	教導説ハ人性ノ	
which it is the business of the educator to awaken, strengthen, and regulate	人タル者ハ~ (能力ヲ) 発起セシメ之ヲ 堅壯整齊ニ為シ~ (educator は「人タル者」に対応)	
(p.593右)	to be drawn out, exercised and instructed	人ノ智心ヲ啓キ之ヲ錬磨教導シテ
	a scheme of education	教導ノ法ヲ設クル時ハ
	acknowledge as accordant with common sense, however unprepared they may be to trace it to its foundation	其人性ニ適シテ教導ニ益アルヲ認ムルニ 至ル可シ
	such a scheme	教導法ヲ説キ以テ
	adopting the appropriate divisions	其教導ノ法ハ之ヲ分ケテ
	the philosophy of the subject	教導ノ理論

では、"Education"は総べて「教導」と訳されているのであろうか。「はじめ」において述べたように訳語は「教導」と「教育」との間を揺れ動き定着していない。「教導説」における「教育」の使用箇所を表

8に訳者の緒言を含め、訳文と原文を示した。訳者緒言に2ヶ所、本文の上篇、下編を通じて11ヶ所あり、原文に見あたらない箇所が1ヶ所ある。なお、右欄については後述する。

表8「教導説」において「教育」となっている部分の原文との対応

Table 8. The phrases in Article "Education" in which word "Education" is translated into "Kyo-iku."

<p>註：15右などは、訳書15頁右などを、またp.596Lなどは、原文596頁左欄を示す。</p>		<p>森(1993 P.140)註(14) 「教育」は、<家庭側> 「教導」は、<学校側> に留保されている</p>
訳者緒言	<p>世ノ父母タル者其子ヲ教育スル～ 亦人ノ父母タル者ヲシテ普ク教育ノ要ヲ知ラシムルニ～</p>	<p>「教育」<家庭側> 「教育」<家庭側></p>
上 篇	<p>15右 原文頁 p.595L</p> <p>然ルニ當時不幸ニシテ父兄ノ其子弟ヲ教育スルヤ This education of circumstances, though so powerful, is unfortunately not always within the command of well-meaning parents.</p>	「教育」<家庭側>
	<p>28右 p.596R</p> <p>今若シ卑賤ノ童子ヲ教育スル学校ニ於テ獸類ヲ苦虐スルノ不善タルヲ教諭スル時ハ大ニ此害ヲ除ク裨益ヲ為スコシ It is very desirable that those who conduct schools in which the children of the humbler classes are educated, should address themselves particularly to the formation of habits favourable to humanity.</p>	「教育」<学校側>
	<p>43右 p.599L</p> <p>母又ハ乳母タル者～稚児ヲ教育スルノ初メハ Let a mother feel as she ought ~ a child's earliest moral training</p>	「教育」<家庭側>
	<p>59左 p.600R</p> <p>此ニ由テ之ヲ考フレバ道ノ教ト心ノ教トハ交互ニ之ヲ施シテ並ビ進マシメザルヲ得ザル事瞭然タリ教育ヲ為ス者宜シク意ヲ是ニ留ムベシ It is plain that the moral and intellectual training must proceed hand in hand. 「教育ヲ為ス者宜シク意ヲ是ニ留ムベシ」の部分は原文に見あたらない。</p>	
下 篇	<p>1左 p.600R</p> <p>教育ヲ為ス方法ヲ論スルニ於テハ In a rightly arranged and complete course of elementary intellectual education, it is presumed that ~</p>	
	<p>8左 p.601R</p> <p>児童教諭ノ道ヲ知りタル父母ハ第一児童ニ此等ノ諸事ヲ教ユルヲ以テ主要ト為スト雖トモ惜哉児童ヲ教育ス可キ務アル者懇切ニ此等ノ事ヲ教ユルノ余暇ナク又其余暇アリト雖トモ或ハ其能ナク或ハ其煩勞ヲ厭ヒ終ニ児童ヲシテ此大益を得ル事能ハザラシムルニ至ル Most parents of intelligent and well-regulated minds take care that such should be the nature of the answers given to the first inquiries of children; but it is needless to point out, that many persons who have children under their care, either possess not the ability, or have not the necessary leisure, or will not be at the pains, to give correct and satisfactory answers.</p>	「教育」<家庭側>
	<p>32右 p.605L</p> <p>幼童ノ教育ノ為メ父母心得方ノ書 Directories 幼童教育書 Education</p>	「教育」<家庭側> 「教育」<学校側>
	<p>43左 p.606R</p> <p>教師トナル可キ者ヲ教育スル一種ノ学校ヲ schools for the training of teachers</p>	「教育」<学校側>
	<p>55右 p.608L</p> <p>方今教育法中ノ一難事トスル所ナリ one of the chief educational problems of the day</p>	
	<p>56右 p.608L</p> <p>貧困ノ児童ヲ教育スル諸学校 almost all institutions for the education of pauper children</p>	「教育」<学校側>

表8をみると、<子供>関連語が「教育」と結びついているように見えるが、必ずしもそうではなく「教導」も関連している場合がある。それを表9に示した。

「教導説」から「教育論」に改訳したとき、本文にも手を入れて改訳した箇所を表10に示した。「教導」から「教育」へだけでなく訳語を変えたものもある。また、「教導説」が「教育説」になっていたり、「幼童」がそのままであったり「幼」であったり、訳の不統一がみられる。「養育」等の「教導」あるいは「教育」関連語に変化はない。このように若干の改訳はあるが、本質的な変化はなく、改訳は概ね機械的に「教導」を「教育」に改訳したようである。

(3) 「教導」と「教育」の混用と理由

以上のことから "Education" を一義的に「教導」に翻訳しているのではなく「教育」と混用していることが分かった。

この事情は、先に述べた「泰西勸善訓蒙」についても同様で、前編 (Bonne版訳) では、「教育」のみ2ヶ所あり「教導」はない。後編 (Winslow版訳) では、「教育」は3ヶ所、「教導」は27ヶ所と混用している (補足3)。

1866年に、辞書の上では、"Education" は「教育」となったが、実際は、上述のように公用語においても、また、世間一般の言葉においても定着していたわけではない。箕作麟祥は、祖父が箕作阮甫 (1799-

1863)、父が省吾 (1821-46)、義父秋坪 (1825-86) と洋学者一家の出自であり、堀達之助の「英和對譯袖珍辭書」(資料1)の編纂に協力したこと (宮地正人1997) を考えれば"Education"が「教育」に対応していることは十分承知しているはずであるが、幕末、明治初期には翻訳者個人が翻訳語をめぐって揺れ動き定着していなかったのである。

「教導説」から「教育論」への改題の問題は、福鎌 (1968) によって提起されたが未解決である。本稿で扱うのは福鎌が指摘していない混用の問題である。

何故、このように訳語の不統一があるのか、この疑問を解くために、以下の3つの項目にしたがって検討する。

(A)単純な誤用か、(B)文脈によるものか、(C)政治的・社会的背景の影響か。

(A) 単純な誤用かー訳語と原語の使用頻度

箕作は "Education" が既に「教育」に対応していることを知っているのだから、単純な誤用で「教導」と「教育」を混用したかも知れない。その可能性を調べるため「教導」と「教育」関連語の使用頻度を調べ表11に示した。この表から「教導」関連語語数128に対して「教育」は、訳者緒言を含めて13で「教導」の約10%もあり、両語の混用が単なる誤用には多すぎる。すなわち、混用は単なる誤用ではないことが分かる。前述の「泰西勸善訓蒙」前・後編においても、「教育」の使用頻度は「教導」の約10%である。

表9 (少年、児童など+教育) だけではなく (+教導) もある

Table 9. The phrases in which not only Youth, Children+"Kyo-iku", but +"Kyo-do."

訳者緒言	小学校教導ノ法ヲ概論セシ者	「教導」<学校側>
上 篇	2右 p.593L 貴族ノ少年輩ヲ教導スルニ to fit the youth	「教導」<両者>
	17左 p.595R 児童ノ教導ヲ為ス者 (意訳) in which a child reared	「教導」<両者>
	28左 p.597L 児童ヲ教導スル bring up a child well	「教導」<両者>

表10 その他の変化

Table 10. Other revises

教導説		教育論		他に気づいたこと:
教導説	上p.4右	教育説	p.4	「教導説」の下篇「百科全書篇名には「物理学」とあるが、本文中では「格物窮理学」となっている。「教育論」にはない。
	上p.10右	(教育論ではなく)	p.11	
ジムナスチック	上p.11右	そのまま	p.12	
	上p.11左	体操	p.12	
幼童学校	下p.1左	幼学校 (童がない)	p.64	
幼童有ル所ノ	下p.29左	幼童在ル所ノ	p.96	
養育、訓導、教誨、教訓、教習、教諭、教授などの関連語はそのまま				

表11「教導説」における「教導」・「教育」関連語数
Table 11. Words "Kyo-do" and "Kyo-iku" in "Kyo-do setsu."

	訳者緒言	上篇	下篇	計	合計
教導	3	29	50	82	
教導説	2	6	6	14	
教導法	1	24	5	30	
教導ノ制度			1	1	
教導者		1		1	128
教育	2	4	7	13	13

表12には、CIP原書の項目「Education」における語 "education" に意味が似た語の数を示した。"education" 関連語が多く、特に "education" が113と最も多い。

表12 CIP における "EDUCATION" 関連語数
Table 12. "Education" and related words in the original.

education	113	teacher	27	training	24
educate	13	taught	16	train	15
educator	12	teaching	9	untrained	1
educational	5	teach	6		40
educating	3		58		
educationist	2	learn	16	instruction	13
uneducated	1	learning	8	instructive	3
self-education	1	learner	1	instruct	2
mis-education	1		25	instructing	1
	151				19

これら表12の語が表11の「教導」関連語と組み合せて訳文を形成しているのである。それにしても、一冊の本、一人の訳における訳語の混在は何を意味するのであろうか。

なお、上の統計は、国立図書館蔵の無年記版と同じ内容である「1867年の米国版」(表1)のtextをMaking of Americaのホームページからダウンロードし、そこから抽出したものである。

(B) 文脈による訳語の使い分けか

箕作は何故、原文の "education" 関連語を総べて「教導」と訳さず、ある所では「教育」と訳したかを文脈によって次の手続きで検討しよう。

(a) 訳文の文脈による訳語の使い分けか

(b) 原文の文脈による訳語の使い分けか

先に、表8で「教導説」全文中で「教育」が使用されている部分を示した。箕作の緒言で2、本文の上篇で4、下編で7ヶ所ある。これら「教育」は、改訳版「教育論」においてもすべて「教育」のままである。

(a) 訳文の文脈による訳語の使い分けか

箕作が原書の "Education" を「教導」、または「教育」と翻訳したかについて訳語の観点からの考察には次の森、森川の研究がある。

森(1993 第四章註14 p.140)の考察は、「教導説」における、箕作自身の下記「緒言」を分析して「教導」は<学校側>に、「教育」は<家庭>側に留保されているとした。

「其要旨ハ固ト小学校教導ノ法ヲ概論セシ者ト雖トモ兼亦世ノ父母タル者其子ヲ教育スルニ欠ク可カラザル道ヲ辯明セシ書タリ」

この内容を「教導」<学校側>、「教育」<家庭側>と表記しておこう。

森の「教導」<学校側>および「教育」<家庭側>の使い分けを、本稿では、箕作による緒言に止まらず、翻訳本文についても検討し、表8の最右欄に示した。この表をみると「教育」<家庭側>だけでなく「教育」<学校側>の例もあり、必ずしも森の分類と調和しない。「泰西勸善訓蒙」においても同様で(補足3)、それらを包括する考えが必要である。

表11で見たように「教導」等が関係する所は128ヶ所ある。今のところこれらに系統的な使い分けがあるかどうかは解明されていない。

表9に「教育」-児童の関係だけではなく、「教導」-児童の関係もある例を示したが、これらを包括する使い分けの考えも必要である。

森川(2002, p.275)は次のように述べている。

「欧米文化の翻訳事業の先頭を走り、学制取調係をも務めた箕作が、Education を当初「教導」と訳したことは、学校という場が教師を中心にした個人の知育中心であると解したためであつたらう」。

これは、森の「教導」<学校側>に通じるものであり、上述の森に対する分類に調和しない。

(b) 原文の文脈による訳語の使い分けか

上述のように訳語の前後の文脈に違いはないと考えられるので、次に「教導」と訳されている原語の "Education" 関連語前後の文脈について検討した。表8に "Education" および関連語前後の文脈を比較したが、箕作の訳の意味づけができる系統的違いを認めることはできなかった。

このように、訳語と原語の文脈から「教導」と「教育」を使い分ける理由を知ろうとしたが箕作の意図は不明のままである。

(C) 政治的・社会的背景の影響か

まず、幕末、明治初期の「教育」、「教導」という語の環境を述べておこう。日本語大辞典(2001)による「教育」と「教導」の意味、および年代別用例の一部を補足10に示した。

既に述べたように、"Education" が孟子の「教育」

と日本で出会ったのは、堀越亀之助が「改正増補英和對譯袖珍辭書」を刊行した1866年頃で、Lobscheidの「英華字典」が密接な関係があると推測され、その後の辞書では、殆ど"education"は「教育」へ英和、「教育」は"education"へと和英されている。Lobscheidの「英華字典」では「教育」、「教導」、「教化」の語が"Educate"の訳語として"to bring up"の意味で「教育」に、"to teach"の意味で「教導」「教化」が記載されている(村瀬・田中2001)(資料1)。

「教育」について、森(1993 p.47 表2)が、詳細に漢和辞典、「教育」のテキストを調べて「教育」という語は、17世紀、徳川幕府が成立するまで、日本では「死語」であったと指摘し、「教育」という語の当時の使用について検討を加えている。

さらに、森(1993 四章註12、p.138)は「教化」と「教導」についても言及し、結局、「例外も多々あるが、あえて図式化すれば、私たちがこんにち作用として念頭におくさいの<教育>が、幕末から明治初年にかけての「教導」にあるように思える」とした。

このような状況にあって、既に述べた箕作の訳における「教導」の使用、しかも、「教育」と混用の不統一は政治的・社会的に何を意味するのであろうか。

森川(2002, p.276)は、1878年の教導から教育への変更は、「田中不二麿による「学制」政策の全面転換が始まる時点と重なっていた」と指摘している。この指摘は、当時の政治的背景と箕作の関わりを整理した表13の「学制」頒布、廃止と「百科全書」翻訳刊行の時間的關係から確かなことであろう。

これとは別に、表13は、また「学制」との關係と同様に、神祇官・神祇省の流れで1872年に教部省管轄で設置された「教導職」の設置、教則三条の提示の時期も考慮すべきことを語っている。

大槻文彦の大言海には、「教導」について

「(一) ヲシヘ、ミチビクコト。(道ハ導ニ同ジ)(二) 特ニ、神道、佛教ヲ以テ、人ヲ教導スルコト。」(新編大言海 大槻文彦 富山房)とあり、「教育」に比べ「教導」には宗教の色彩があり、これが教部省の教導に關係することになったと推測されるのである。

表13にあるように、神祇官の流れには、その設置、文部省の創設、神祇官の神祇省への改め、神祇省の廃止と教部省の設置、教部省と文部省との合併、また分離、さらに、教部省の廃止と目まぐるしい変化があり、教部省と文部省の間に葛藤があった。この点について狐塚(1994)が詳細に検討し、合併については、次のように述べている。

「合併といっても両者の脚以下大小丞までが両省を形式的に兼任したに過ぎず、実態は一方の専任といってもよかった。文教省という造語が使われた例はあるが、予算も布達も書類形式も従来同様別々であったし、単に同じ

表13 文部省と神祇官等関連年表

Table 13. Chronological table of Ministry of Education and Jingikan (a commissioner of the Shinnto religion.)

陽暦	事 項
1868.1.3	王政復古の大号令
2.10	新政府、官制(三職七科の制)を發布 神祇事務科設置
12.10	箕作、開成所御用掛、学校取調御用を経て御用掛となり法律書の翻訳
1869.8.15	神祇官設置
1870-74	箕作、「仏蘭西法全書」訳 大教宣布の詔出る*
1871.7-8	箕作、編集頭となり「百科全書」の翻訳開始
9.2	大学を廃し、文部省を創設
9.22	神祇官を改めて神祇省とする(神祇官の格下げ)
10.31	文部省に編集寮をおく(教科書の編纂、洋書の翻訳等を行う)
1872.1.11	箕作、文部省の学制取調掛となる
4.21	神祇省を廃し、教部省をおく
5.31	教部省管轄の教導職**設置
6.3	国民教化の基本大綱(教則三条)*** を教導職に示す
9.5	「学制」頒布
11.25	教部省を文部省に合併 文部卿大木喬任教部卿を兼任
1873.2.9	教部省、国民教化の要項として(十一兼題)を制定、教導職へ配布
3.18	文部省、(学制二編)を頒布
5.14	文部省、(学制二編)を改正し、公教と宗教との分離を進める
7	「百科全書」和訳版の刊行開始
8.28	文部省、教導職の学校教師兼勤を禁止
9	箕作、「百科全書」のEducationの項目を「教導説」と訳して刊行
10.2	十七兼題を出す
1874	箕作、「学校通論」翻訳刊行
1875	CIP 5th ed. 英国で刊行
1877.1.11	教部省・東京警視庁を廃止し、事務を内務省に移す
1878	箕作、「教導説」を「教育論」に改訳
1879.9.29	「学制」を廃し、「教育令」を定める
大教宣布の詔* 教導職** 教則三条*** (補足11)	

庁舎に同居しているに過ぎなかった (p.146)。

また、両省の関係については次のように述べている。

「学制の特徴の一つに、教育と宗教の分離がある、とよくいわれることである。しかしこの原則も一時期大きく揺れ動いた。そしてこの動揺の時期が文部、教部両省の合併期と一致するのである」(p.137)。

「合併自体にこの狙い、つまり学制遂行にあたって、寺院の利用、僧侶の動員を円滑に行う目的があったと推察されるのである。」(p.145)

文部省と教部省の、こういった状況下であって、箕作の心情は両省の狭間で揺れ動いたのであろうか。彼に関する文献などを見ても、先の「泰西勸善訓蒙」から抄録した金言に英米の教訓書からの訓戒の言葉を盛り込んだ教科書「教の道須知」はあるが、教部省寄りの証拠を得ることは出来なかった。

1873年7月アメリカから帰国した森有礼が、西文明国流の学会・啓蒙活動の団体を発起し、箕作も創立社員として設立・発会に参加した明六社設立主旨は「我国ノ教育ヲ進メンカ為ニ有志ノ徒会同シ其手段ヲ商議スルニ在リ〜」であるし、箕作の明六雑誌への投稿は、いずれも英語版の訳で「人民ノ自由ト土地ノ気候相互ニ相関スル論」といったものである(高野繁男・日向俊彦 1998)。

また、1871年、箕作は文部省設立と同時に文部省出仕を命じられ、学制取調掛の主任格として欧米の学校制度をモデルにした学校制度法令の起草に当たり、その「学制」は同年9月5日に頒布された。このことから箕作は文部省寄りであり、彼が「教導」に固執する必要はなかったと考えられる。したがって、政治的・社会的背景が「教導」と「教育」の混用に対して顕わには影響を与えなかったと結論する。

5. 結び

まず、箕作の「教導説」の原書について本稿は、内容の検討から福鎌と同様、国立国会図書館蔵の無年記英国版CIPであると結論した。その無年記版の刊行年については、まず、無年記版が1867年米国版と外見、Contents、本文内容など全てが同じであることを確かめた。次に、CIPの刊行年代別リストを作ると、殆ど同じ年に英国と米国において対で刊行されているが、1867年の米国版に対する英国版の対が欠落していることが分かる。その欠落を埋めるのは、米国版の内容などが同じである無年記版以外にはない。したがって、無年記版は1867年に刊行されたとするのが妥当と結論した。

「無年記」版の日本への持込みには、フルベッキ説、福沢諭吉説があるが、その可能性は低い。新たに国立国会図書館蔵「無年記」版扉の寄贈印の意味を

検討し、畠山義成である可能性を指摘した。この版がどのようにして箕作の手に渡ったかは依然不明である。

次に、箕作の訳文を検討した。当時の訳文は、漢文体で書かれ、流暢にするために英語原文を要約したり追加したと云われている。本稿では一部を試訳して、箕作の訳は翻訳というより翻案とした方がよい部分もあることを確かめた。

訳語を翻訳文全体からみると、箕作は、1871-73年刊行の「泰西勸善訓蒙」前・後編で「教導」と「教育」が混在するように、「教導説」においても不統一で混在している。その混在の理由について以下のように検討した。

(1) 単純な誤用でないか検討するため、「教導」、「教育」関連の使用頻度を調べたところ「教導」128に対し「教育」は13もあり、単純誤用とは思えない。定評のあった箕作の語学力の面からも単純誤用はあり得ないであろう(補足8)。

(2) 訳語または原語前後の文脈による使い分けがあるかを検討したが、系統的な違いを認めることはできなかった。ただ、文脈について云えば、当時の文部省の布達などで「教導」と「教育」の混用がみられ(補足9)、この状態が一般的であった可能性はある。

(3) 最後に、政治的・社会的影響を検討したが、当時の文部省と教部省との葛藤の背後にある政治的なものによる箕作の心情の揺れについては、箕作自身の経歴はそれを否定し、意識的影響はないと思われる。

したがって、表13に示したように、「学制」政策の全面転換がはじまり、次第に中央集権的国家が形成されるにつれ、文部省の設立前後の目的が変質することもあり、「教育」は"Education"として同定されていくという歴史的経過のなかで収束していったのである(田中2005)。したがって、公用語においても、一般社会においても、「混用」、あるいは「使い分け」の期間は去り、その環境で箕作の視点も「教育」に落ち着き、「教導説」は「教育論」になったものと思われ、森の「要するにこの時期、〜<教育>と<教導>は言わばすくみあっていたわけである」(第4章の註11 p.139)という表現は「言い得て妙」である。

謝辞 本稿は福鎌達夫(1919-1968)の論文に負うところが大きい。敬意と謝意を表したい。

なお、本研究において様々な方からご意見を頂いたが、誤謬、粗漏について教育、言語の研究者、および博雅の士のご意見、ご批判を頂ければ望外の喜びである。

補 足 (Supp. explanation)

補足1 1879年の教学聖旨から、1882年の軍人勅諭までの2年半ほどの間に、学校教育のあり方を転換させる重要な文書が文部省からいくつか出された。教育内容については1880(明治13)年8月30日に、教科書として使用を禁止する次の文書が発表された。

「～教科書ノ儀追調査候處別紙甲號書類ハ書中小學校教科書トシテ不妥当之條項有乙號書籍ハ小學校ニ於テ教授スヘキ性質ノモノニ無之ニ付小學校教科書ニハ採用セサル方可然～」とあり、甲號に「泰西勸善訓蒙」後・続篇、乙號に福沢諭吉の「通俗国権論」が対象となった。

補足2 (補足8も参照) 大槻文彦篇「箕作麟祥君伝」(1907) 日本近代思想大系15「翻訳の思想」加藤周一・丸山真男編集岩波書店 (1991) p.303-315。

1871 / 7または8(明治4年7または8月)「私(佐原純一)はもと南校に居て、明治四年の七月か八月に編輯寮(註1)の大属になりましたが、其時、編輯頭を箕作先生がやって居られました。其時分先生が頭になって、『チャンブル』の百科全書、-『インフォルメーション、オフ(マ)、ピープル』(註2)とか云ふもの、百科ばかりあるので、あれを訳にしようと思って、引っぱどいて賃訳(註3)に出しました。～むづかしいものになると誰も引受けてが無い。さう云ふのは箕作先生が引受けて訳されました。～後に、幾らか訳字が変わりましたが、箕作先生が新規に拵へた訳字が随分あります。～」(明治四十年十一月)。

(註1) 編輯寮 明治四年九月、文部省に設置、五年九月廃止。(註2)『チャンブル』の百科全書 チャンブルは英国の出版社Chambers. 原題はInformation for the People (2 vols)で明治六年から十六年にかけて文部省から分冊刊行された。十年以降の合本版の刊行は丸善商店などに委託された。麟祥は文部省版では「教導説」(明治六年)、合本版では「自然神教及道徳学」(第一六冊明治十六年十月)、「教育論」(第一八冊、明治十一年四月)を担当している。

(註3) 賃訳 賃銭を取って翻訳すること。(なお、当時の翻訳料の高さについて、鴻巣友季子が新潮社「波」2005/11 p.72に「噂」から松浦総三の記事を引用して以下のように述べている。「明治四年に箕作が「百科全書」を翻訳したときには、翻訳料は200字につき4円であった。なお、明治10年ごろには、区役所の用務員の給料が5円、右大臣(岩倉具視)の月給が600円。左大臣(大久保利通)は500円であった。「教導説」は400字詰め60枚ほどである」)。

(註4) 此三人の・・・ 前述の池山栄明の回想には、「箕作先生は、辻の筆を入れたのを、校正とは言はせない、「正」と云ふ字は、与へられない、と言はれて、ただ、「校」と云ふ字だけ許されました。それですから、本にな

ったものに、「辻士革校」とあります。「校正」とはありませぬ」とある。

補足3 「泰西勸善訓蒙」は前編(Louis Charles Bonne著、原書は不明)、後編(Habard Winslow著、原書はMoral Philosophy)、続編(Laurens Perseus Hekock著、原書はSystem of Moral Science)からなる。

前篇卷下第五篇の第153章：「子ヲ教育スルニ如何ニ訓誡褒賞譴責ヲ加フト雖モ父母ノ習慣悪シク」、第154章：「親ハ子ヲ教育スル務アレハ子ハ親ヲ尊敬シ」といづれも「教育」<家庭側>である。

後篇第三章では多く用いられている「教導」は、「父母其子ノ心ヲ教導スルニ」等のように「教導」<家庭側>である。

補足4 p.54『『新版』New Editionと銘うたれた無年記の原書の目次は、前述のとおり合本版に『英吉利文法』English Grammarの一項が見あたらぬ以外、全項目の表題も配列も一致する。これだけのことから推定は尚早としても、分冊本や合本版の『百科全書』が、この新版を底本としていることは明らかである。』

この新版が福鎌(1968)の資料篇に掲載されている「百科全書」原本扉、序、目次の図版をみると、この版には「明治十年、故東京書籍館長畠山義成」(山田久2004)による寄贈印があり、現在、国立国会図書館で見ることのできるものと同じであることが分かる。そのVOLUME IIのCONTENTSを見ると、ENGLISH GRAMMARの項目がある(図版4)。しかし、無年記版にはEnglish Grammarはある(1842版にも既にある)。何故、福鎌が上のよう記したかは不明である。

なお、図版中の「7月か1860年版扉」とあるのは、扉の記載を読むと、刊行年不明版で「LONDON AND EDINBURGH VOLUME IIの扉」である。箕作訳「教導説」がCIPの何年版なのか、何版目なのかの問題は、箕作訳に何の記載も、情報もないことに起因しているが、CIPの第4版の訳であるという福鎌(1968 p.57)の考えを補足して説明しておこう。

① CIPの初版は1833年版である。(Dictionary of National Biographyによる)(また、1875年版PREFACEに次の記載がある) It is now forty years since CHAMBERS'S INFORMATION FOR THE PEOPLE first issued from the press.

ただし、前記 Chambers Online Reference (www.chambersharrap.co.uk/chambers/chref/chrefpy/main)では、1834年となっている。

② 国立国会図書館所蔵の無年記版の原注(p.606、箕作訳下篇p.43)に「To the importance of Normal Schools the following testimony is borne by Mr

E.C.Tufnell, one of Her Majesty's Inspectors of Schools (1856)」とあり、この版が1856年以降のものであることを示している。

③ 上記無年記版は1857年版ではない。何故ならば、両者のCONTENTSが違う。

④1857年版は、箕作訳の底本ではない。何故ならば、両者のCONTENTSが違う。

⑤ 1875年版は第5版である。(扉に「FIFTH EDITION」の記載がある)。これが箕作訳の底本ではない。何故ならば、この版のCONTENTSが箕作訳のとうし、箕作訳は1873年出版ゆえあり得ない。

⑥ 国立国会図書館所蔵の無年記(18-?)版(NEW EDITION VOLUME I, II W.& R. CHAMBERS LONDON AND EDINBURGH)のPREFACEに次の記載がある。

After the lapse of eight years since the completion of the third and improved edition of the INFORMATION FOR THE PEOPLE, ~

この8年という年数は1)と2)から、平均改訂年数を見積もった年数約10年に近い。(1875-1833=42 42/4=10.5)、したがって、1833年を初版として、8~10年を加えていくと、大凡、第2版は1841~43、第3版は1849~53年、第4版は1857~63年となり、第5版が1875年となる。逆に1875年から10~8年を差し引いていくと、第4版は1865~67年、第3版は1855~59年、第2版は1845~51年となる。

⑦ ②のVOLUME IIのMILITARY AND NAVAL ORGANISATION「海陸軍制」篇(この項は1857年版にはない)に、下記のように1865年の統計があるので②は1865年前のものではあり得ない。(p.194 The military strength of British may be estimated in 1865 as follows, ~)

⑧ 箕作訳の出版は1873年である。以上のことを年代順に並べまとめると

①1833<②1856<③1857<⑦1865<無年記版(18-?)<1833+(8~10)=1857~63 または、1875-(8~10)=1865~67(維新前後)<⑧1873(箕作訳)<⑤1875(第5版)。故に、無年記版は1860年代である。

補足5 平凡社編「百科事典の歴史」における記載は次の通りである(p.57)。「明治四年に箕作は文部省編纂寮頭となったので、フルベッキの蔵書からチェンバーの『国民必携』(Information for the people, 5th ed.)を譲り受けた。」この記載における「5th」の発刊年は1875年であり、1873年の箕作訳は不可能である。この点を除けば、フルベッキ説は必ずしもあり得ないことではない。

補足6 福沢諭吉について。

福沢諭吉「福翁自伝」(1898-99)『時事新報』に連

載、多くの新訂版がある。例えば 富田正文注解による慶応通信版(1957)、富田正文校訂 岩波文庫(1978)。

1867.1.23 福沢諭吉、再び渡米。6.27 江戸に帰着。

「その金をもって今度こそは有らん限りの原書を買って来ました。大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論、そのほか法律書、経済書、数学書などもそのとき初めて日本に輸入して、~」福翁自伝p.193。

ニューヨークのアップルトン社から大小20箱も買いつけてきた本を「身分不相応の物」として没収される。謹慎、謹慎解除、出仕。持ち帰った本の返却があった。「私がチェンバーの経済論を一冊持っていて」福翁自伝p.184

補足7 畠山義成について。

田中 彰(1977)の例言p.11「書記官畠山義成(当時杉浦弘蔵ト称ス)、久米邦武二人ニ命シ」、p.15「邦武此ヲ筆記スルニアタリ畠山氏ト意ヲ協シ」。校注11 畠山義成：薩摩藩士。天保11年(1840)、日向の名族畠山氏の末裔で、一所持格の家に生まれ、知行高272石。慶応元年(1865)、薩摩藩留学生の幹部級として参加、変名は杉浦弘蔵。森有礼、吉田清成らとアメリカに渡り、ラトガース・カレッジを卒業した。明治4年(1871)4月、太政官から呼び戻され(註)、岩倉使節団に加わった。明治5年1月、三等書記官となり、久米邦武とともに岩倉使節に随行して、紀行の編輯を担当した。帰国後は開成学校長兼外国語学校長。9年、文部大輔田中不二麿とともに渡米し、教育制度を視察したが、その帰途、船中で客死した。

上記の(註)：田中 彰(1994)「岩倉使節団『米欧回覧実記』」同時代ライブラリー 岩波書店： p.13には「久米とともに筆録を担当した三等書記官畠山義成は、一等書記官塩田三郎などとともに現地参加である」。p.52には、「明治四年(1871)四月、召還の命をうけたが、翌五年、アメリカで三等書記官として加わった」とある。

富田 仁編(1985)「~明治4年4月、明治維新政府より帰国命令を受け秋の卒業と同時に帰国の途につくが、欧州経由のハリで岩倉使節団随行を命じられ、再びアメリカにもどり案内役を務めるかたわら随員の久米邦武と『米欧回覧実記』を筆録する。6年9月13日使節団とともに帰国。~」

補足8 箕作麟祥の語学力について。

当時の箕作は、1867年フランスに渡りフランス語を修得し、1870年「ナポレオン法典」の翻訳を命じられ、「注解書も、字引も、また教師もいない」状況の中で、和装木版40冊を完成させたが、それは、後に箕作自身が「間違いだらけの本」であったと述懐している。また、訳語に関して箕作は、「原文の意味は解っても、訳語がないのに困った」と回顧している(加藤・丸山1991 p.350：箕作麟祥氏の演説 明治二十年九月十五日)。この事情は「Education」についても同じで訳語が固まりつつあったものの必ずしも定着していなかったことと考えられる。

しかし、英語については、さきに述べたように練達の士であり、自信があったことは確かである（補足2の註4 および下記の外山捨八）。

外山捨八：「此時に当り海内の士最も完全に英語を話し得るもの、唯一の箕作先生ありしのみ、英語のイデオムは、今の英語者、尚且理解に苦むものなるに、当時先生は善く之を了解して、読み書きに毫も不自由を感じざりき」。

補足9 森（1993 p.17）が1871（明治4）年文部省の正院へ伺い、また布達にある2例を示している。以下に1例を示すと、1872（明治5）年4月22日文部省は学制発布に先だって小学教師教導場建立の伺いを正院に提出した。この伺いに対して五月正院から許しがあって、東京にわが国最初の師範学校を設置することを決定した。文部省は、「東京ニ師範学校ヲ開キ規則ヲ定メ生徒ヲ募集ス」る件の布達を發して、趣旨を明らかにした。「今般東京ニ於テ師範学校ヲ開キ候師範学校ハ小学ノ師範タルヘキモノヲ教導スル処ナリ〜 外国ニ於テモ師範教育所ノ設ケ有之ニヨリ〜」（「法令全書」明治五年第五卷ノ二）。

補足10 「教育」「教導」（日本語大辞典 小学館2001）。

教育 ① 教育 知識を与え、個人の能力を伸ばすこと。現代では、一定期間、計画的、組織的に行う学校教育をさす場合が多い。② ①を受けた結果、身についたもの「教育がある」「教育がない」の形で用いる。

1682 新語園序「何法あって而教育せん」

1783 授業編四「弟子を教育ましまして前聖の道をへ伝へたまふ」（後昆：後世の人、子孫）

1816 先哲叢談三・熊沢蕃山「其廉潔不_レ愧二古之君子一、必教育所_レ致也」

1868 万国新話<柳河春三編>一「学校の制を变革し、教育法を補正し」

1878-79 花柳春話<織田純一郎訳>五「マルツラバースのアリスを教する、真に難しと謂ふべきなり」

1887-89 浮雲<二葉亭四迷>一・三「私の朋友なんぞは教育の有ると言ふ程有りゃしませんガネ」

教導 [名]教え導くこと。教えを説いて導くこと。教道。

715 続日本紀-靈龜元年五月辛巳「今失職流散、此亦國郡司、教導無方、甚無謂也」

1177-81 色葉字類抄「教導 ㄅㄅ」

1283 梵舜本沙石集三・八「凡そ機法のあはひ、分明に教導有りき」

1773 十善法語一〇「もし初心の時真正の善知識にあふて、その教導をうれば」

1868 万国新話（柳河春三編）二「国法をも犯し罪に陥るの恐れある童子を教導し、氣質を変化し良民と為す」

大宝積經-六四「天主恒以慈悲心在天数教教導彼」

補足11 大教宣布 天皇崇拜中心の神道教義布教を目指して1870（明治3）年に始まった国民教化運動。72年教部省設置に伴い組織的に推進。75年大教院廃止により挫折（広辞苑第5版）。

教導職 明治政府の神道国教化・大教宣布運動の推進過程に、神祇省および宣教使廃止後、1872（明治5年4月、新たに設けられた教部省管轄の、大教宣布・民衆教化活動を専門とする教化活動を専門とする教化要員（官）の職名。（新教育学大事典 細谷俊夫他編）。

三條教則 1870（明治3）年の大教宣布ノ詔で宣教使が任命され、教部省は教化に当たる教導職を14階級に分け任に当たさせたが、その取り締まりのために東西両部に館長を置き、1972（明治5）年3月に教導上の教憲として三ヶ条が大教正（一級）に授けられた。三條教則または教則三条ともいう。

第一条 敬神愛國ノ旨ヲ體スヘキ事

第二条 天理人道ヲ明ニスヘキ事

第三条 皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシム可キ事。

文献 (References)

Chambers's family: Chambers 家とその出版社の歴史は、次のホームページで知ることが出来る。
www.chambersharrap.co.uk/chambers/chref/chref.py/main

私信①：Chambers Harrap Publishers Ltd (7 Hopetoun Crescent, Edinburgh EH7 4AY UK: www.chambersharrap.co.uk)

"~ Unfortunately it would take us a considerable amount of research to provide answers to all your questions in detail, and I am afraid that we do not have the resources available. I can tell you, though, that the first edition of the book was published in 1835. ~"

私信②：Lippincott Williams & Wilkins (530 Walnut Street, Philadelphia, PA 19106 USA) "~ Unfortunately, Lippincott no longer holds the copyright to this title. You will need to contact HarperCollins in New York to inquire about this title.~"

私信③：HarperCollins Publishers Inc. (10 East 53rd Street New York, NY 10022 USA) "Unfortunately our records do not contain any material on this book, we are unable to answer your questions."

私信④：例えば、University of OregonのDr. Glen A. Love, Professor of English, Emeritus. および Dr. Sam Boggs, Jr., Professor of Geology, Emeritusによって、原書は現在使用されていない語法で書かれていることを教示された。謝意を表したい。

太政官布告（第三百二十二号1872）教部省を文部省に合併（文部教部両省被合併候事：明治五年十月二十五日）。

フィンハース著 箕作麟祥訳（1873）「百科全書 教導説上・下」文部省刊行明治6年9月 明治初期教育稀観書集成 全23帙 唐沢富太郎編集 雄松堂書店（1980）。

フィンハース著 箕作麟祥訳（1873）「百科全書 教導説 上・下」文部省刊行明治6年9月 近代日本教科書教授法資料集成第一巻教授法書Ⅰ pp. 285-338.

太政官布告（第四号1877）教部省廃止（教部省被廃候事：但従前ノ事務ハ内務省へ被付候事明治十年一月十一日）。

フィンハース著 箕作麟祥訳（1878）「百科全書 教育論全」文部省印行 明治11年 文部省百科全書19青史社（1986）。

外山捨八（正一）：大槻文彦（1907）「箕作麟祥君伝」丸善p.183.

明治以降教育制度發達史第二巻（1938）文部省内教育史編纂会 第十一款 教科用圖書 p.494.

福鎌達夫（1968）「明治初期百科全書の研究」風間書房 pp. 373. 第一部 総論、第二部 本論「文部省百科全書」訳述考、第三部 余論（西周、自由民権、長谷川如是閑を扱っている、第四部 資料篇（図版）。

尾形裕康（1971）「日本教育通史」早稲田大学出版部p.162.

中村敏夫（1973）「近代日本教育思想史」国土社 p.20.

田中 彰（1977）「特命全権大使「米欧回覧実記」（一）久米邦武編 田中 彰校注 岩波書店（文庫）。

日本歴史学会編（1981）「明治維新人名事典」吉川弘文堂p.962.

仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫（1982）「近代日本教科書教授法資料集成 第一巻教授法書Ⅰ」、pp.285-328.解説付き 総説（三）（四） pp.733-740. 解題pp.761-763.東京書籍.

富田 仁編（1985）「海を越えた日本人名事典」日外アソシエーツ（株） p.471.

木村力雄（1986）「異文化遍歴者」森有礼 福村出版p.48.

山住正己（1987）「日本教育小史-近・現代-」岩波書店 p.41.

加藤周一・丸山真男編集（1991）「日本近代思想大系15『翻訳の思想』」岩波書店. p.372-373.

平田論治『官定英訳教育勅語における翻訳の思想』『英学史研究』第26号（1993）p.59（官定英訳以外の訳についても言及している。）

森 重雄（1993）「モダンのアンスタンス」教育のアルケオロジー 第4章「＜教育＞のバリエーション」

p.61の注12、pp.138-139 ハーベスト社.

狐塚祐子（1994）「明治五年教部省と文部省の合併問題：『学制』とのかかわりを中心に」清泉女子大学人文科学研究所紀要／清泉女子大学人文科学研究所16

宮地正人（1997）混沌の中の開成所 東京大学資料編さん所 http://www.umu-tokyo.ac.jp/publish_db/1997_Archaeology/01/10300.html

高野繁男、日向敏彦監修・編（1998）「明六雑誌語彙総索引：付復刻版明六雑誌」大空社（明六雑誌No.5.6.1874）。

川村二郎・池内 紀（2000）「翻訳の日本語」中公文庫 中央公論社

村瀬 勉・田中萬年（2001）「『教育』と『EDUCATION』との出会い-16~19世紀の外国語辞書の変遷より-」職業能力開発総合大学校紀要第30号 pp.27-47.

森川輝紀（2002）「新体系日本史16『教育社会史』」辻本雅史・沖田行司編山川出版社p.275.

（7章 立身出世主義と近代教育 2 訳語としての「教育」の登場、「教育」と教学の相克）。

山田 久（2004）「『田中不二磨』から『樋口千代松』まで-名古屋と図書館の先人-」愛知研究会報告4（151回）。

Encyclopedia（2005）<http://www.encyclopedia.com/html/H/HarrisTILLasp>.

鴻巣友紀子（2005）「明治大正翻訳ワンダーランド」新潮新書 新潮社

国立国会図書館（2005）第128回常設展示 印の継承譜-国立国会図書館の印と印影-

田中萬年（2005）「『文部省』名の意味と変質」職業能力開発総合大学校紀要第34号B pp. 21-32.

資料1 本研究で使用したの辞書の系譜と関連事項 (日付は陽暦)

Reference mat. 1. The genealogy of English-Japanese dictionaries in the early 19 century.
 村瀬・田中(2001)の一部に加筆した。辞書は枠で囲まれている。実線は改正、増補を含み、
 辞書の編纂者が頭わに参考にした関係を、鎖線は、その関係が明らかでないものを示す。

西暦	事 項	CIP及び箕作麟祥 (1846-97) 関連事項 (新教育学大事典1990、近代日本総合年表岩波書店など参照)
1783	江村北海「授業編-四「弟子を教育ましまして前聖の道を後昆へ伝へたまふ」」 (尾形裕康1971、中村敏夫 1973)	箕作麟祥、幼名貞太郎、後に貞一郎、
1862	英和對譯袖珍辭書 (文久二年江戸開板) : 堀 達之助 教育の語はない Educate-ed-ing, v.a. 養ヒ上ル Education, s. 養ヒ上ル	CIP 1857 英国版、及び米国版が刊行された 1861.6蕃書調所英学教授手伝 並出役のち開成所教授見習
1863	Hepburn 来日、薩英戦争	英和對譯袖珍辭書の原稿完成に協力
1865	薩摩藩秘かにイギリスに留学生を派遣	
1866	改正増補英和對譯袖珍辭書 慶応二年江戸再販 : 堀越亀之助 Educate-ed-ing, v.a. 教育ス Education, s. 同上ノ事 Webster's Dictionary of the English Language を利用 (杉本 1999)	1866-69 英華字典 : Lobscheid Educate, to bring up, 養育、教養、教育、(毎育) to teach, 教、教訓、掌教、教導 教誨、教化、開化、開導、教習 Educating, instructing, 教養、教育 養育 Education, the bringing up, as of child. 養者、育者 instruction、教者、教育 教学、教之道、訓道、教法、子女之教訓、子女之教育 (「教育」はない) 増訂華英字典 : Lobscheid原著、井上哲次郎 (1906)ではEducationに教育が加えられている
1867	改正増補英和對譯袖珍辭書 2版 堀越亀之助 「改正増補」の再販。内容は同じ Educate-ed-ing, v.a. 教育スル Education, s. 同上ノ事	1863.12家督相続、開成所教授見習 1865外国奉行支配翻訳御用頭取として福沢諭吉らと翻訳に当たる 1867随員としてフランス万国博覧会に赴く CIP 1867 米国 版刊行 この年、無年記の英国版 (国立国会図書館所蔵) が刊行されたか
1.23	福沢諭吉、再渡米	
6.27	江戸に帰着	
1868	2.10 神祇事務科設置 10.23 明治元年 (陰暦9.8)	1868.12.10 開成所御用掛、学校取調御用掛を経て御用掛となり法律書の翻訳
1869	1.14 木戸孝允、「普通教育に関する建言書」 (一般国民の知識向上の営みを教育と表現している) 8.15 神祇官設置	1869 自宅に私塾「共学舎」を開設、フランス学を教授
	和訳英辞書 (改正増補和訳英辞書 通称 薩摩辞書) : 高橋新吉ほか Educate-ed-ing, v.a. 教育スル Education, s. 同上ノ事	1870-74訳「仏蘭西法全書」

1871 8 箕作麟祥訳「泰西勸善訓蒙」に「教育」の語あり
 9.2 文部省創設
 9.22 神祇官を改めて、神祇省とする（神祇官の格下げ）
 11.20 岩倉具視等欧米教育制度視察団欧米各国に派遣の理由の一つに「各国教育諸規則、乃チ国民教育方法」の調査をあげている
 大正増補 和訳英辞林「薩摩辞書」2版
 薩摩学生 前田正毅 高橋良昭

1872 英和對譯辭書 開拓使版
 Educate 教育スル
 Education 同上ノ事

2 森有礼、米有識者に日本の教育について意見を求める。
 | 回答を1873年「Education in Japan」として刊行
 4.21 神祇省を廃し、教部省をおく
 5.31 教部省管轄の教導職を設置
 6.3 国民教化の基本大綱（教則三条）を教導職に示す（資料2）
 9.5 「学制」頒布、開智学校開校
 10.25 教部省を文部省に合併（太政官布告第三百二十二号 狐塚祐子（1994））
 文部卿大木喬任教部卿を兼任

和英語林集成再版：J. C. Hepburn
 再版以後「教育」の語があり、educationの語もある
 KIYÔ-IKU, キャウイク, 教育, (oshiyesodateru),
 Instruction, education
 — suru, to educate, to instruct and bring up
 EDUCATE, t.v. Kiyôju suru, shi-tateru,
 kyôkun suru oshiyeru, shi-komu, shi-tsukeru.
 EDUCATION, n. Kiyôju, kyôkun, shi-tate.

1873 附音挿図英和字彙：柴田昌吉、子安 峻
 Educate, 養育スル、教育スル、教訓スル、
 教化スル
 Education 養育、教育、教訓

1874 広益英倭辞典
 大屋愷欲他編

6. (明治7年) ["History of civilization in England" by Henry Thomas Buckle
 1865] を大島貞益訳、「英国開化史」として訳す。訳文中に education
 = 教育あり。加藤周一、丸山真男（1991）

1877 教部省廃止（太政官布告第四号）

1879 「学制」を廃し、「教育令」を定める

1886 改正増補和英英和語林集成：J. C. Hepburn
 ローマ字表現が変わり、語が増えた
 EDUCATEにkyôiku suru. EDUCATION
 にkyôiku. が増えた

1889 福沢諭吉「教育の文字ははなはだ穩当ならず、よろしくこれを發育と称すべきなり」と主張

1890 「教育勅語」発布、1907年（明治40年）の官定英訳教育勅語において「教育」は「Education」と訳されている（平田諭治1993）

1871.7~8 編集頭となる、
 「百科全書」の翻訳開始

8. 訳Bonne著「泰西勸善訓蒙」
 (原書1867) 前編刊(73.9後編刊)

10.31 文部省に編集寮をおく
 (教科書の編纂、洋書の翻訳等を行う)

1872.1.11 文部省の学制取調掛となる

1873.3 訳ウールジ著「國際法、一名、万国公法」

7. 「百科全書」和訳版を刊行開始

8. 森有礼、學術の研究・講談のため学社を結成することを西村茂樹にはかる（明六社の起源）

9. CIPの項目「Education」を「教導説」として翻訳刊行

1874訳「学校通論」

2. 明六社制規制定され、正式に発足、箕作麟祥参加

6. 訳ジョンネ著「統計学」刊行

1875 CIP 5th ed. と明記の英国版刊行

1878「教導説」を「教育論」と改訳刊行

資料 2 「Education」の緒言部分の原文、箕作麟祥訳、筆者による[試訳] (抄訳) の比較

Reference mat. 2. Comparison between the original and the versions by Mitsukuri and the present writers.

[注意] CIPの原文に対応する箕作訳の選択は難しい。概ね対応すると考えて頂きたい。また、使用した漢字などは、そのままのものと現代漢字が混用されていることも了承されたい。

[]内は、1857 New and improved edition, W. and R. Chambers, Philadelphia: J. R. Lippincott & Co. 版。

太文字は、国立国会図書館所蔵の無年記版New edition W. and R. Chambers, 英国版 (1867版米国版) で改訂された部分。箕作麟祥訳は、「百科全書 教導説 上・下」文部省刊行明治6年9月 明治初期教育稀観書集成 全23帙 唐沢富太郎編集 雄松堂書店 (1980) による。

原文	箕作麟祥訳	試訳
<p>[Till within the last few years.]</p> <p>It is not many years since the idea commonly entertained with respect to general elementary education, comprehended only certain branches of instruction familiarly known by the terms reading, writing, and arithmetic.</p> <p>A 'liberal' education added ancient and modern languages and mathematics.</p> <p>Such formed the entire round of accomplishments which were supposed, with the accident-directed moral training of the domestic circle, to be sufficient to fit the youth of even the highest classes for entering upon the varied duties of life.</p> <p>Nor was this scanty education thought requisite for all.</p> <p>(一部省略)</p> <p>The study of the ancient classical languages, while still admitted by candid persons to be also a means of improving the intellect, is now no longer upheld, excepting by a few, as the grand instrument of liberal education, the character in which it was generally regarded a few years ago.</p>	<p>今ヲ去ル猶ホ 僅カ数十年前ニ至ル迄初学教導ニ用フル学科ハ読、書、ノ三科ヲ以テ足レリトセシ事是レ通常英国人民ノ唱ヘタル説ニシテ</p> <p>其後所謂博通教導法ヲ設ケシニ因リ較々増ス所アリト雖トモ亦唯、古語、新語及ヒ数学ノ三科ヲ加ヘタルノミニ過ギズ、然レトモ當時ニ在テハ纔カニ此等ノ学科ト父兄ノ教訓トノミヲ以テ将来成立ノ後、世上百般ノ務ニ應セシメント欲スル最高貴ノ少年輩ヲ教導スルニ足ルト思料シ殊ニ卑賤ノ民ニ至テハ此等僅々ノ数科ト雖トモ亦其教導ヲ受ケシムルヲ要セサルノ説普ク國中ニ布キシ故ニ</p> <p>且古語ヲ学ブガ如キモ之ヲ以テ人智ヲ開ク一端ナリト為スノ論ハ方今猶正直無私ノ者頗フル主張スル所ト雖トモ是レ亦往時ノ如ク博通教導法中ノ最主領ノ者ト為ス人ハ幾ント稀ナルニ至ル</p>	<p>(英国では) 数 (十) 年前まで一般の初等教育において普通に受け入れられていた考えでは、読み、書き、算術の語でよく知られている教育の部門 (だけ) でよいとされていた。</p> <p>(その後) 教養教育においては古典語、近代語、数学が加わった。</p> <p>このような学科目は、家庭内で経験的に教え込まれた道徳的躰と共に、最高の階級でさえ若者を、実生活で果たさなければならぬ様々な義務に適應させるのに足りる十分な教養と考えられた。</p> <p>(しかも) このような不十分な教育さえも全ての人に必要とは考えられていなかったのである。</p> <p>また、偏見をもたない人々は、古典語の学習が知性を向上させる手段であると、今も認めているし、数年前では一般的にそのような性質のものであったが、今ではもはや僅かな人を除き、一般教養の主要な手段であるとは考えられていない。</p>
<p>[It is now seen that this study gives to the youth of the middle and upper classes but a portion, and in many instances not the most requisite portion, of what they should know on entering the world. The old elements of education may therefore be said to have sunk from their former character of all-sufficiency, and to have now taken their place as only parts of a complete education.]</p>	<div data-bbox="646 1566 976 1897" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>1857版にあり、1867版ではなくなっている部分</p> </div>	<p>[今のところ、この古典語の学習は、中・上流階級の若者の一部であるが、社会に出るに当たって知っておかなければならないことを、多くの場合、最も必要なことではないが、教えるものであると思われる。したがって、教育の昔の内容が以前の万能的性質のものではなく、今では完全な教育の一部分の役割を果たしているにすぎないと云われている。]</p>
<p>The primary meaning of the term educate, from the Latin educare, to lead or bring out, does not ill</p>	<p>教導ノ原語タル「エジュケート」ノ字ハ元ト羅甸語「エジュカレ」ヨリ由来スル所ニシテ其本義ハ誘</p>	<p><educate>は、<導く、または、引き出す>を意味するラテン語<educare>から派生した語であつ</p>

express the first great principle of the science.

[While fully acknowledging the difficult under which every candid writer on education must lie, the present would humbly endeavour to make the nearest approach to a correct system which his views of the natural character of the human being will admit of.]

He considers the race as exhibiting a definite mental constitution, in all its parts harmonising with the surrounding universe.]

(以下に変更)

The present attempt at sketching a scheme of education proceeds upon the assumption that the human race exhibits a definite mental constitution, in all its parts harmonising with the surrounding universe.

(一部省略)

Of the mental system, he views those faculties which constitute the intellectual powers as requiring to be drawn out, exercised, and instructed, so that they may operate readily and efficiently for all the various purposes which they are designed to serve; and those, again, which constitute the moral feelings as calling for the exertion upon them of all external moral influences - at the head of which stands the revealed will of God with regard to human destiny - in order that the best possible state of feeling may be attained with regard both to the affairs of the present and to a future state of existence.

Upon these views of man's character a scheme of education may be founded, which rational persons, as yet unprepossessed by other notions, will, he thinks, generally acknowledge as accordant with common sense, however unprepared they may be to trace it to its foundation.

[He will] He will, therefore, without further preface, proceed to describe such a scheme, adopting the appropriate divisions into physical, moral, and intellectual, and combining, as far as his space permits, practical directions with what may be called the philosophy of the subject.

導ノ意ナリ故ニ其字義タルヤ能ク教導ノ旨趣ト相適ヒ

1857版の部分で1867版では以下に変更

此書ニ記スル所ノ教導説ハ人性ノ何物タルヲ論スルハ姑ク置キ唯人タル者ハ宇宙間ノ萬物ト相吻合セシ一定ノ稟性アリト看做ス所ニ原キ以テ

第二ニ人ノ智心ヲ啓キ之ヲ鍊磨教導シテ能ク百般ノ用ニ供セシムルヲ論シ第三ニ人ノ善心ヲ淬励鼓舞ス可キ為メ勸善懲惡ノ教ヲ設ケ

且人ノ運命ニ管スル天道即チ經典ニ記スル所ヲ説テ現在未來ノ諸事ニ及ボシ以テ人ヲシテ善心ヲ起シ惡心ヲ制セシムルヲ論ゼントス

蓋シ今此三者ヲ眼目ト為シ以テ教導ノ法ヲ設ケル時ハ意フニ世上偏執頗僻ノ見ヲ懐カザル有識ノ士若シタヒ此書ヲ讀ム必ズ其人性ニ適シテ教導ニ益アルヲ認ムルニ至ル可シ

因テ別ニ序言ヲ贅セズ直ニ其教導法ヲ説キ以テ教導ノ理論ト之ヲ實際ニ施ス可キ方法トヲカメテ詳カニ辨明セントス即チ其教導ノ法ハ之ヲ分テ三種トス一ハ体ノ教ニハ道ノ教三ハ心ノ教是レナリ

て、教育における最も重要な原則を良く表している。

[教育について率直な意見を書く人は多く、それが間違っている恐れがあることは十分に承知しているが、著者(私)は、微力ながら、人間の本性が認める正しい大系に最も近づくよう努力をしたい。]

著者は、人類には明確な精神の本質があり、その細部にいたるまで宇宙の万物と調和する形で表れているものと考えている。]

この書は、教育体系の概要を述べようとするもので、人類には明確な精神の本質があり、その細部にいたるまで宇宙の万物と調和する形で表れているという仮定に基づいて進められる。

精神の大系について、著者は、引き出され、訓練され、教育されなければならない知的な力を構成する能力を考える。そのようにすると、それは役立つ色々な目的に容易に、かつ効果的に働くようになる；

そして、著者は、さらに、現在、自分に関わりのある色々なことと、将来どのように生きていくかについて、最善の可能な状態を取得できるように、全ての外からの道徳的影響に対して一人間の宿命に関して啓示されている神の意志が至上であるが、知力が発揮されなければならない道徳心を生み出す能力を考える。

人間性についての、これらの考察に基づいて、教育体系がつくられる。その(教育体系の)基礎まで遡る準備が出来ていないにしてもまだ他の意見による偏見を持っていないような見識有る人々は、この教育体系が常識と一致すると一般に認めるだろう。

したがって、著者は、さらなる序言なしに、教育体系を、身体・道徳・知力の三部門に便宜的に分けて論じ、また、紙面の許す限り、いわゆる教育の原理と実践的指導とを結びつけて概要を述べる。

"Kyo-Do Setsu" in "Hyakka-Zensho"
—The translation of an Article "Education" by Rinsho Mitsukuri—

Tsutomu Murase, Ari Hayakawa and Kazutoshi Tanaka

[Notes] "Kyo-Do Setsu": a theory of teaching and leading people. "Kyo" means "teaching," "Do" "leading" and "Setsu" "a theory" respectively. "Kyo-Iku Ron": a theory of teaching and bringing up people. "Iku" means "bringing up" and "Ron" "a theory" respectively. "Hyakka-Zensho": "Hyak(u)" means "one hundred," "Ka" "items" and "Zensho" "Encyclopaedia" respectively. "CIP": the abbreviation of "Chambers's Information for the People. The Ministry of Kyo-bu: the Ministry organized by "Kyo-do shoku" et al., Buddhist and Shinto priests et al. who instructed people at the time. "Shoku" means "officer."

In 1873, Rinsho Mitsukuri (1846-97) translated and published an Article "Education" of CIP as "Kyo-Do Setsu" and in 1878, he revised the title to "Kyo-Iku Ron".

This paper discusses the Japanese words translated from an English word "Education" in CIP in 1860s, and tries to find a clue that makes clear a state of political and social confusion in the early days of Meiji era. Some questions which arose as to the translation are as follows:

1) What was the original translated as "Kyo-Do Setsu"? 2) When was the original published in UK? 3) When was the original brought in Japan? 4) How did Mitsukuri translate the original? 5) Why did the translator translate "Education" into "Kyo-Do Setsu" as the title? 6) Why are the two Japanese words, "Kyo-Do" and "Kyo-Iku," for one English word "Education" mixed in the version? 7) Why did the translator change "Kyo-Do" to "Kyo-Iku" in the title and text of the revised version in 1878?

These questions were explained by a comparison between the original and translated version of the Article "Education" in CIP as follows:

1) The original CIP is concluded to be the London and Edinburgh edition CIP without the date of publication (n.d. UK ed.), which is owned by the National Diet Library in Japan by a comparison between the contents of the original and the version.

2) In 1867, CIP was published in Philadelphia, USA, 1867 (US ed.), of which the contents are completely the same as those of the n.d. UK ed. CIP. Many versions of UK ed. and USA ed. were published in almost the same year as if to be paired. However, there is no UK ed. to match 1867 US ed. Only the above n.d. UK ed. can fill in the blank. The year of publication of n.d. UK ed. is, therefore, concluded to be 1867.

3) There are two views about the date when the n.d.-UK CIP was imported to Japan, Verbeck(1830-98) view and Fukuzawa (1834-1901) one. The present paper proposes another possibility. There is a presentation stamp on the n.d. UK CIP which shows that the presentation was made by the late Yoshinari Hatakeyama. Hatakeyama (1843-76) was a student studying abroad, in UK between 1865 and 1867 and in USA between 1867 and 1873. There is a possibility that Hatakeyama bought the n.d. UK CIP in 1867 and sent it to Japan.

4) The style of the Japanese versions in 1860s was written in classical Japanese in Chinese style and was an adaptation (free translation) rather than a translation (literal one). This paper confirms that Mitsukuri's version was also the same as the style in 1860s.

5) In the Mitsukuri version, an English word "Education" is translated into two Japanese words, "Kyo-do" and "Kyo-iku". The two Japanese words are different in meaning: the former is "teaching and leading" and the latter "teaching and bringing up." The question why the two Japanese words were mixed in the version is discussed as follows:

(a) As Mitsukuri knew that the English word "Education" had been translated into Japanese word "Kyo-iku", he may have made a mistake in selecting Japanese words. To examine whether the selection was a careless mistake, the number of two words, "Kyo-do" and "Kyo-iku", was counted. The number was 128 for "Kyo-do" and 13 for "Kyo-iku". The number of 13 for "Kyo-iku" is too many for a mistake. The mixing, therefore, may not have been done carelessly but intentionally.

(b) We examined the translator may have varied the words according to the context of the original or the translated version, but there was no systematic difference in the context.

(c) Finally the political and social effect on the translator, Mitsukuri, was examined. At the time there was a conflict between the Ministry of Education and the Ministry of Kyo-bu. Did the conflict have an effect on Mitsukuri's translation? There is no sign of mental turmoil in his career.

6) Both "Kyo-do" and "Kyo-iku" are used in official documents of the Ministry of Education at that time. The mixing, therefore, may have occurred unintentionally in translation and even in the official documents. As the Meiji government concentrated its administrative power on the central administration, the government seems to have settled on using one word "Kyo-iku." Therefore, Mitsukuri must have revised the title from "Kyo-do-setsu" to "Kyo-iku-ron."